和田忠彦著
『ヴェネツィア　水の夢』（筑摩書房）

九〇年代にはいってから、毎年一、二冊翻訳書を上梓し、昨年はカルヴィーノ『水に流して』をふくむ三冊の翻訳書を出した和田忠彦の、これが最初の著書だとは私にはほとんど信じられない。二年まえ、誰にだまされ、どう錯覚したものやら、何かにつけてややこしく、面倒なことばかり起こるこの大学に我々の同僚として、わざわざ古都から赴任してくるずっと以前から、縦横無尽に活躍するお洒落なイタリア文学者として、その名前をよく知っていたからだ。いずれにしろ、「たぶん老いを意識するようになったころからだろう、身のまわりで近しいひとが去りゆくたびに、記憶の薄れる日がくる前に言葉にとどめておかねばという思いが迫上がってきた。その手始めは、ぼくが経験したイタリアの、その時々の〈いま〉を記憶の縁から拾いあげる作業となるだろうという予感」が彼にはあり、我々にとっては幸いなことにも、その予感がこの度ようやく現実の著書となったのが本書である。

ここに登場する「ぼくの出会った作家たち」にはカルヴィーノ、エーコ、タブッキなどがいて、詩人となればモンターレ、ロヴェルシ、セレーニ、ザンゾット、ロッセッリと、びっくりするような名前がつづく。嫉妬と羨望で気が狂いそうになるのは一人、二人ではあるまい。何しろ専門分野を異にする、この私ですらそうなのだから。まして、その出会いのそもそもの始まりが、二十歳を越えたばかりの学生時代にたまたま京都を訪れたカルヴィーノとの、ほとんど運命的な出会いにあったと知れば、その「幸運」に私ならずとも歯ぎしりしたくなるだろう。だが、それは間違っている。その名に値する「出会い」というものは、たんなる「幸運」のみに還元できるはずもなく、たしかに「幸運」の要素があるにしても、それ以上にしかるべき礼儀、技法、そして何よりも知恵が必要なことを教えてくれるのが本書なのである。ただ、それがどんな礼儀、技法、知恵であるのかは、野暮をもっとも嫌う和田忠彦のことだから、ここではあえて言わないことにしよう。本書を読めばおのずと分かるはずのことだろうから。

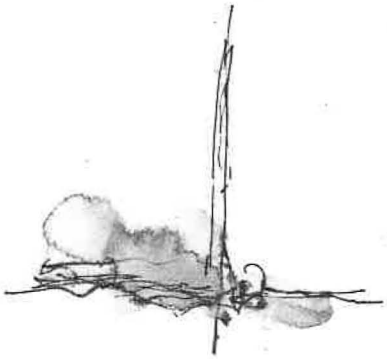
本書を読みながら、私が溜息を洩らし、思わず舌打ちしたくなるほどの感嘆を覚えたのは、驚き恐るべき彼の視覚的な記憶力のことである。それはフェリーニの映画論、あるいはデ・キリコなどいくつかの美術論にもうかがえるが、たとえば詩人セレーニとの、こんな出会いの「記憶の肖像」。

「翌日、セレーニがホテルをたずねてくれた。紺色の帽子を目深にかぶり、ローデンのコートを着た大柄な老人が、ドゥオーモ近くのホテルの狭くて細長い廊下をうつむきがちに、こちらにむかって歩いてきた」。

私とて人並みに「出会い」と言えそうな経験がないわけではないけれども、いくら貴重な「出会い」だとはいえ、出会ったそのひとが、そのときどんな色の帽子をかぶっていたとか、どんな服装をしていたなどということはすっかり忘れている。それが普通ではないか。「出会い」が貴重であればあるほど、そのときの気分の高ぶりばかりが記憶に残って、状況の細部は何も覚えていないものだからである。ところが、和田にかぎってはそうでない。その秘密はおそらく、「はじめてのイタリア旅行のあと、ぼくは、カメラを持ち歩かなくなった。余程のことがない

かぎり、この眼でみたものを、記憶に刻み、時を経てよみがえってくるものだけを、ことばで組み立てて再現することにしたのだ。時を経て記憶から消えていくものがあれば、それは最初から、ことばの風景のなかに居場所をみつけられないものだったと思うことにした」といったあたりにあるのだろう。文学であれ何であれ、これはおよそ「研究者」の態度、あるいは才能ではなく、創作者のそれである。まして「そんな居直りともとれる変化が、旅の折りだけではなく、読書の姿勢にもあらわれてくるようになった」とまで、ぬけぬけと言ってのけるのであれば、なおさら研究者の資格を根本的に欠いていると言わざるをえず、ますます創作者のそれに近づいてくる。

創作者の資格、態度と言えば、本書の批評的ナラティヴにはまさに和田流とでも言うしかない独特の手法がある。いわゆる「外国文学者」、とりわけ不幸にして（私などもふくめ）若気の至りで外国の現代文学に関心をもったお調子者は、得意そうにそれぞれの領域の作家・作品の「紹介」をしたくなる。そのときにまず言わねばならないのは、話題にする作家・作品の固有名詞である。ところが、和田はあえてその逆を行ってみせる。肝心の固有名詞が一向に出てこず、しばしば最後になってやっと言及されるにすぎないのだ。「男は」「目の前にいる六〇歳の女性は」「北国で育った詩人は」「やけにちいさくみえたそのひとは」といったふうに導入される人物とは、いったい誰のことなのかと自問しつつ読み進めていると、やがて途中で、あるいは最後にそれがマラパルテ、ロッセッリ、ブロッキイ、須賀敦子だったと判明する。ひどい（いや、失礼！）甚だしいのは、「見失った声」と題されているエッセイの場合であって、問題になっている作家がエーコだと気づくには、一字一句見のがさずに神経を集中させねばならない。気障と言うか、思わせぶりというか、あざといというか、ともかくほとんど香具師に近いその書法が、いかにも和田流なのであって、しかもその流儀を強引かつ巧妙に押し通すところが、立派と言えば立派である。

そこで私は、イタリア語教師が嫌になったら――そうなる理由はいくらでもある――、さっさと作家に転向することを和田に勧めたくなる。〈遊び〉は無用であっても、無為ではない」ことを教えてくれるイタリアの「ゆったりとした時間の流れ」に身を浸すことを知っている「幸運」な彼ならば、もしかすると彼の心の師とも言うべきカルヴィーノの勧める「軽く見えて実は重い」文学作品を、あんがい楽々と書き上げるかもしれないと思うから。

（西永良成）